

軍隊政治特集：四面楚歌の中国外交

漢和防務評論 20161205 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

最近の中国外交に対する漢和防務評論平可夫氏の評論記事を紹介します。最近の中国外交は文革時の毛沢東の政策に似ており、激烈な内部抗争が対外強硬姿勢となって現れていると述べています。最近、中国人旅行者が千歳空港で暴れたとの記事がありましたが、世界各国で物議を醸しています。中国国内の新聞にもその度に報道されています。背景にあるのは自分たちが差別されているのではないかという被害者意識です。中国の新聞によると、何がしかの金銭で治まっているようです。

平可夫

この4月、5月以降の騒々しい中国外交は、8月になっても変化はなかった。まず南シナ海仲裁問題である。ASEAN 及び日、米への対抗、続いて6月から韓国 THAAD 配備への報復、8月には16艘の海警船及び100艘に近い漁船が日中間で係争中の接続海域に侵入し日本社会を騒然とさせた。韓国、日本、及び東南アジア全体、南太平洋のオーストラリアまで、中国と諍いの絶えない国はない。たとえ如何に頭脳明晰な人であっても、このように見てはどうか？もしあなたの隣人が周囲の人々といつも諍いを起こすような人であった場合、あなたはこの隣人をどう見るか？いつかはこの隣人が間違っていると見ざるを得なくなる、と。

まず最初に南シナ海仲裁問題を見る。中国は南シナ海国家であり、周辺海域国家と領海争いがあり論争中である。これは正常であると認めなければならない。フィリピンは国際仲裁裁判所に提訴した。法治社会、法治国家において、国際法の行為準則は最高の国際社会一般原則である。フィリピンの提訴は正しい。

中国は仲裁結果を受け入れなかった。これも正常である。カナダ社会においても各個人が裁判所の仲裁結果を全て受け入れるわけではなく、上訴することができる。或いは判決を承認せず、同意しない。しかし裁判官を絶対に侮辱しないのが欧州人である。それを知らないアジア系社会（中国系）は、裁判所がフィリピンから賄賂を受け取った、等々喧伝。フィリピンは告訴したが中国は参加しなかった。費用は当然フィリピンが支払った。これは最低限度の法律常識である。

しかも仲裁結果が出たあと、中国軍は南シナ海で何度も大規模軍事演習を行った。これは全く道理に反する。フィリピンは提訴しただけで軍事的に威嚇したわけではない。

KDR はシャングリラ会議での取材記録を公開している。中国の立場を支持すると公的に表明した国は一国も無かった。正式には、ラオスでの ASEAN 外相会議期間及びその後の各国外相の姿勢は極めて明確であった。ASEAN 全体で中国を支持したのはカンボジアとラオスだけであった。ベトナム、フィリピン、シンガポールは仲裁を支持した。中国外交部は反駁した。シンガポールを含め、マレーシア、インドネシア、ミャンマーは仲裁を支持し何度も航行の自由、国際法の遵守を主張した。タイ国はかなり中立であった。総理はシャ

ングリラ会議での発言で国際法の尊重、双方で争いを解決することを主張した。

日、米、オーストラリアは仲裁を支持した。これらの国は周辺の大国であり、このため中国はオーストラリアへの攻撃を開始した。官方メディアはオーストラリアを”紙猫”と称した。これはいかなる意味か、判然としない。

次は韓国の番である。THAAD の韓国配備は、実を言えば、同情に値する。北側では毎日のようにミサイルを試射している。これは容認できない。中国は、THAAD は戦略安定にとって脅威であると認めている。これも道理がないわけではない。確かに THAAD レーダーの探知距離、方位に制限が加えられなければ、中国の弾道ミサイル基地は探知されることになる。中国の憂慮は道理がある。

しかし、なぜ韓国と外交交渉ができないのだろうか？韓国外交は、未だ中国の意図を拒否したわけではない。交渉によって、韓国は THAAD 問題で独立した決断ができる可能性がある、と KDR は考えている。例えばどのようなレーダーを選択するか？どのようにレーダーの探知範囲を制限するか？どのくらいの数のレーダーを配備するか等々である。

中国の官方メディアは、最初から威嚇的な口調で韓国を攻撃し、韓国に THAAD 配備を踏みとどまるよう要求した。環球時報は、解放軍に対し THAAD にミサイルの照準を合わせるよう要求した。現在の韓国与論は中国を支持していない。青瓦台は中国に明確に伝えた：THAAD は必ず配備する、と。

さらにピン트가外れているのは、大国と言われる中国が、THAAD 問題を韓流スターや葡萄酒展覧会韓国代表団のビザ発給、中国観光団の訪韓等の問題にからめたことである。このような圧力が効果があると思ったのだろうか？我々は、安全保障の問題は具体的に解決すべきであるとする。その他の領域、特に文化交流にからめるべきではない。

次は日本である。THAAD 問題の解決まえに、8 月、16 艘の海警船は 100 艘の漁船を率いて東シナ海の日本が主張する領海に侵入した。この海域は主権の争いがあり、もし日本の海上保安庁が同様の規模の艦船を派遣し、日本漁民も 100 艘の船を中国の主張する領海に侵入させたら、中国の官方、民間はどう対処するつもりか？

我々は、争いのある海域の主権問題に対しては、当事者が相応の抑制をすべきであり、事態を激化させるべきでないと考える。

正常な民主的社会においては、政府の外交施策に対して、民間のメディアは本来姿勢が多様であり、百家争鳴状態で、韓国の THAAD 配備問題のような場合は、最初から、民間メディア、社団、国家の中に、支持するものもあれば反対するものもあるのが当然である。

しかし中国の最近 1 年の上述の強硬姿勢は、道理から外れた対外刺激政策である。中国国内には、非難や慎重に研究すべきであるとの声はなく、至るところ、”戦争だ”と叫び、”中華民族””百年復興””外交尊厳”を叫んでいる。ヒトラーが非武装のラインラントに挺進してからの常用句は、”尊厳のない外交は不要”であり、”先祖の土地を失うことはできない”等々、全体主義社会独特の言葉が中国官方の新聞雑誌に充満している。当局者は発狂し、傍観者は冷静である。これは、1936 年のドイツ、日本の宣伝媒体を彷彿とさせる光景である。用語もほとんど同じである。”ゲルマン（中華民族）民族は勝利しなければならない。”（江沢民が、災害救助に派遣された軍人達を慰問した際に、このように述べたことがある。中国人は耳慣れてしまっていて奇異に感じない）”大和民族（中華民族）の復興”も同じである。今日のドイツ、日本の新聞紙上でこのような言葉がでたならば、合理主義思想の洗礼を受けた日本人、ドイツ人は、どう思うであろうか？病んでいる！病状は軽くない！と思うであろう。

真の中国文化は、明代までは周辺国家との友好を重視していた。遠方から来た人々は、皆友人であった。明代の視野の広い外交は、やたら雑言をあびせたり敵を造ったりすることではなかった。清代の外交は、列強の侮辱を受けたが、清の外交政策に責任があったのではない。

我々は、中共当局の現在の対外政策がこの国の大多数の質樸な人民の性格を反映したものであるとは思わない。大多数の質樸な人民は、外部世界から多くの尊敬を受けられるはずである。

しかし、なぜそうしないのか？KDRの答えは明確である：中共内部の問題がますます激烈になっている。特に権力闘争が激しく、経済も減速し、社会問題も多発している。十九大（中国共産党第十九回大会）の前に、権力闘争はますます不透明さを増している。団派、総理、江沢民派系が粛清されるはずである。したがって目をそらすため外部に多くの敵を造らねばならない。1969年の毛沢東は、このような策略をめぐらした。同時に強硬姿勢で”全世界の人民は団結し、米帝国主義を打ち負かす”ことを要求した（520 声明）。これと同時に同年 3 月、ソ連のダマンスキー島での局地戦争を発動した。同時に 2 つの超大国と軍事的に対抗できるエネルギーはあったのか？また林彪元帥は 1969 年末に 1 級戦備命令を発した。中国の小学生は防空壕に隠れる方法を演練するのに忙しかった。1966 年から 1971 年になり、4 年も経たずに国家の第二位、第三位、第四位の指導者が徹底的に粛清された。関連して打倒され、或いは左遷されたベテラン将領たちは 100%に達した。

北朝鮮の金正恩は、最近の 3 ないし 4 年間で同じような行動を採っている。ミサイルや核兵器、平壤の大通りには迷彩の自動車を走らせている。それに伴って行われているのは、自分の叔父の処刑や軍内の大粛清である。

金正恩がこの考えに至ったからには、自らを反省する時期が来たのかもしれない。本文作者の人生経験、多くの経験に照らせば、自分が必ずしも正しいとは限らないのだ。

以上